■編集・発行　NPO法人 大谷石研究会
〒321-0345　栃木県宇都宮市大谷町350番地
（有限会社　高橋佑知商店内）
TEL028-652-0005　FAX028-652-2337
http://www.ooyaishi.org/
mail:info@ooyaishi.org
編集責任者　塩田　潔

大谷石研究会では、会員の募集をしています!

入会の資格は、年齢、性別、職業、地域を問いません。
「大谷石が好きだ」という事だけです。
現在、20代から80代の約110名の会員がいます。
年会費は個人会員3,000円、特別会員10,000円です。
入会希望者は、左記の事務局へ問い合わせて下さい。

〈研修旅行〉
県北の日本遺産を巡るツアーに参加して

NPO法人大谷石研究会理事　永見 正明

令和2年10月3日、コロナ禍、参加者15名で中型バスに1シート1人座りと万全な体制で県北を巡りました。2018年度、栃木県からは「大谷石文化」と「那須野が原開拓」が、日本遺産に認定されました。改めて那須野が原を確認してみようとの試みです。

最初に訪れたのは「那須野が原博物館」。ここで那須疏水のおおまかな生い立ち、そしてエリアに次々と作られた農場。農民の生活様式。那須開拓のさまざまな文化に触れることができました。この後、乃木希典旧宅及び西郷神社、千本松牧場内の松方別邸、そして千本松牧場での昼食。午後からは旧青木家那須別邸（明治の森道の駅）、山縣有朋記念館を見学してツアーを終えます。

ツアー中にも感じましたのは那須野が原の広大なエリアに、嘆願活動を含めて五年そこそこで完成した那須疏水（70キロの疏水は約5カ月で完成）。ちょうどその頃、明治18年は東北本線の宇都宮～大宮間が開通。那須疏水のエリア内に続々と作られた農場群。明治30年代までに30以上あった農場、その4分の3が華族のものでありました。今回ツアーで訪れた5か所の施設はすべて華族の農場です。

同じ時期に作られた安積疏水の開墾は、ほとんど窮乏士族の手によって行われました。琵琶湖もそうだったと言われます。明治維新に俸禄を失った士族の救済が目的でした。

華族の農場とはいったい何だったのでしょうか。そもそも華族とは何か。辞書によりますと、「華族という身分は明治維新前の幕藩体制における公卿（大臣や納言）ならびに諸侯（大名など）を代替えする身分として設けられた」とあります。華族のつくった農場は華族農場と言われます。

那須の華族農場は明治維新の英雄達の農場です。おもだった12の華族農場の所有者は、4名が薩摩藩、4名が長州藩、2名が佐賀藩。あと長府、大垣藩。なぜに英雄達は農場経営を目指したのでしょうか。憂国の士であったのもわかります。西欧貴族へのあこがれもあったのかもしれません。

岩倉使節団は、明治4年11月から明治6年9月までアメリカ合衆国、ヨーロッパ諸国に派遣された使節団である。岩倉具視を全権とし総勢107名。明治維新の英雄達に大いなる影響を与えたことと思われます。

「明治貴族が描いた未来～那須野が原開拓浪漫」二十一世紀の令和の秋。歴史が大いに躍動した明治からコロナ禍にある停滞の現実を実感した一日でありました。

会員紹介

「田中・門前地区にての石蔵集落調査参加が縁で」

一級建築士　久宮 強さん　（フケタ設計）

一昨年秋、「今週末時間ある、土曜日手伝えない」の一言から、気が付いたら大谷石研究会に入会していました。フケタ設計の久宮 強と申します。令和元年10月に行われた田中・門前地区にての石蔵集落調査に当時の当社顧問である佐藤公紀さんに誘われ調査に参加し、その日のうちに入会の運びとなりました。

栃木県人である私にとって大谷石は、特に興味上るものでなく、近くにあるものでした。小学校の旅行は平和観音の前での記念写真、大谷石の蔵、塀、旧南那須町の実家の石垣は大谷石ですが、蔵は土蔵です。石蔵文化圏から外れた場所ですが、丘陵を隔てた高根沢は古い農家には石蔵が見られます。県内でも鬼怒川エリアと那珂川エリアの堺で、石蔵と土蔵の所有が変わるようです。

中学の修学旅行で行った明治村で帝国ホテルを見て、「こんなところに大谷石が在るのだ」と思い、後からフランク・ロイド・ライトを知り、建物としての意識よりも、身近な風景としての認識が大谷石にはあります。建築設計を仕事としています。素材として、景観としての魅力のある材料に係わっていけたらと思います。鹿沼には大谷石に類似した深岩石があります。現在深岩石の戦前の工場建物の一部解体し、新設工場を作る計画に関っています。解体された深岩石は利用価値があるか分かりませんが関心のある方はお声かけください。